

林武史退任記念展

石の勝手

Mind of Stone

Exhibition honoring
retiring Professor HAYASHI Takeshi



2023 9.30_土 > 10.15_日

会場：東京藝術大学大学美術館本館3階、陳列館1階

休館日：10月2日(月)、10月10日(火)

開館時間：10時～17時(入館は16時半まで)

入場無料

主催：東京藝術大学美術学部・東京藝術大学大学美術館

助成：東京藝術大学美術学部杜の会

協力：東京画廊+BTAP、柳ヶ瀬画廊

お問い合わせ：050-5541-8600 (ハローダイヤル)

ウェブサイト：museum.geidai.ac.jp





1



2



3

東京藝術大学大学美術館 THE UNIVERSITY ART MUSEUM



〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8 ※当館には駐車場はございません。
 ・JR上野駅(公園口)、東京メトロ千代田線根津駅(1番出口)より徒歩10分
 ・京成上野駅(正面口)、東京メトロ日比谷線・銀座線上野駅(7番出口)より徒歩15分

本展は、長きにわたり東京藝術大学美術学部彫刻科において教鞭を執ってこられました林武史の退任記念展です。林は「空間にものが存在するとは、どのように解釈すればよいのか」という問いかけを起点とし、1980年代後半より彫刻家としての活動を開始しました。その後、この問いかけは、「空間」「身体」「物質」「記憶・時間」というテーマを内包した彫刻の実践へと展開されていきます。

一方、林は学内において上記のテーマに沿った4つの展覧会(「空間の変容」1997、「彫刻の身体」2003、「物質と彫刻」2013、「時間/彫刻」2019)を企画し、学内外の彫刻家との協同により、彫刻とは何かという問いを深度化させるとともに、後進の育成に尽力してきました。「石の勝手」と題された本展は、林が文部省在外研修員(パリに滞在)としての滞を終えた1999年以降の代表作と新作により構成されています。パリへの渡航前と渡航後の自身の仕事について林は、「素材/手法に関して変化はなかったが、さまざまな事象の受容において、自分の中で大きな変化があった」と語っています。それは、世界共通の言語(彫刻)を追い求めることから一旦距離を置き、この国における風土(風景・湿度・人との関わり等)を思慮することで起こった変化だったのではないのでしょうか。

石の性質を受け入れ、しかし、決して素材と馴れ合うことのない近接関係。この、一定の距離感を保ちながら繰り返される着想とその跡形は、林の問いそのものと言えます。

物質の勝手、作者/観者の身体性、風土、それぞれの偶然を招き入れ、予測できない多くの事象を孕む今回の林の試みをぜひ高覧ください。また、会期中には林と同世代の彫刻家4名によるクロストーク「僕たちの時代」の他、ギャラリートークの開催を予定しています。こちらも奮ってご参加ください。

彫刻科研究室

林武史 HAYASHI Takeshi

1956年 岐阜市に生まれる。

1982年 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。

1995年 東京藝術大学彫刻科専任講師となる。

1998年-99年 文部省在外研究員としてパリに滞在。

2012年 第6回円空大賞円空賞。

林武史は石による世界の探索者である。それは存在自体を問うものから存在者の事実と意味へ、水平垂直という座標空間の分析からメタファーに満ちた空間の総合へ、存在の前提をなす時間から記憶という生きられた時間への探求に至る。そして石も変わる。探索は彫刻から発したが、今、それを再び彫刻と呼ぶのは便法に過ぎない。

1. 林間 Rin-kan (2004)
2. 夢間 Yume-ma (2017)
3. 青の園 Blue Sanctuary (2018) Photos 1-3 ©Tadasu Yamamoto
MV. 水田 Rice Field (2001) Photo ©Hiromu Narita

関連イベント① 10月5日(木)13時より
 「林武史と藤井匡氏によるギャラリートーク」
 藤井匡(東京造形大学教授)会場:大学美術館本館3階

関連イベント② 10月7日(土)14時より
 「僕たちの時代」-4名の彫刻家によるクロストーク
 林武史、中瀬康志、丸山富之、松井紫朗 会場:陳列館1階